



Theodor Reikと日本の心理臨床家の応答論

著者	原谷 直樹
雑誌名	文学部心理学論集
巻	6
ページ	55-63
発行年	2012-03
その他のタイトル	Theodor Reik and Japanese psychotherapists : "response" in their theories
URL	http://hdl.handle.net/10112/7928

Theodor Reik と日本の心理臨床家の応答論

原 谷 直 樹

I. 序

心理療法についての話の中で、「応答」と聞くとどんなことを思い浮かべるだろうか。おそらく真っ先に思い浮かぶのは、セラピストの言語的な返しとしての「応答」であろう。「そこでセラピストはどう応答したのでしょうか？」とスーパーヴィジョンの中で、取り上げられることを思い浮かべるかもしれない。しかし、よく検討してみると、「応答」という言葉は、心理臨床の中で、さまざまな意味で用いられ、多層的な定義が可能な用語である（原谷, 2009）。それは、ただ単に、セラピストの「発言」や「返事」という意味に止まらず、内的な感情、センスや気づきなどとしても使われる概念である。この内的な反応という意味での「応答」を最初に概念化したのは Theodor Reik（1948）である。Reik は、応答を、解釈に先行するセラピストの内的な反応の総体であると考え（Reik, 1948; 原谷, 2010）。「応答」は、面接をしているときに起こってくる様々な感情や思考というセラピストのいわゆる「主観的反応」（Greenspan & Greenspan, 2003）にとどまらず、直観や閃きを含む、総体であり、ひとつの全体としての意味を持っているゲシュタルトである（原谷, 2010）。

Theodor Reik の応答論については、いくつかまとめられてきたし、その概念の現代の精神分析理論における位置づけについても明らかにされてきた（Arnold, 2006; 原谷, 2010）。しかし、Reik の「応答」にあたる、言葉や現象が、

日本の心理療法論の中で、どのように用いられ、また論じられているのかということをはっきりとした論文は、筆者の知る限りまだ見られない。そこで、本研究の目的は、代表的な日本の心理療法論をいくつか取り上げ、その中で、Reik のいう「応答」にあたる概念がどのように扱われているのかを明らかにすることである。

Reik の「応答」にあたる概念が、どのように、それぞれの臨床論の中で言葉にされているのかを考えることで、心理療法の本質の理解につながる新たな発見があるかもしれない。村瀬（2003）は The Society for the Exploration of Psychotherapy Integration の機関紙を通覧し、異なる理論と技法の組み合わせが中心となっており、統合的にアプローチするセラピスト自身の資質や姿勢、訓練への言及がほとんどみられないと指摘している（村瀬, 2003, p221）。Reik の応答論は、まさにセラピスト自身の資質や姿勢、センスについての概念であり、さまざまな立場の臨床家の理論との照合は、こうした心理療法の統合についての議論にとっても有意義であると考えられる。

II. 各臨床家と応答

(1) 神田橋條治と応答—「ニュアンス」及び「胸骨部をアンテナにした共感法」と応答—

神田橋（1984）の「精神科診断面接のコツ」には、次のような記載がある。神田橋の師である桜井図南男先生の面接でのエピソードである（神田橋, 1984, p9）。統合失調症か否かが問題

となっているケースで、はっきりした所見はなかったが、桜井は「おそらく、分裂病だと思う。一月以内に、はっきりとした一級症状があらわれるでしょう」とコメントする。実際、2週間ほどして幻聴などの症状が現れたのである。神田橋は桜井先生に理由を尋ねるが、答えは「あんなニュアンスの患者を、何人も診たことがあったから」であった。

神田橋はこの経験のインパクトを、「おそらく十年ほど、このエピソードを繰り返し思いだしては、溜息をついたものであった。(神田橋, 1984, p9)」と表現している。そして、その溜息から「診断面接の質を量る唯一の尺度は、近い未来をいかほど言い当て得るかにある (p10)」ということ、そして「技術は伝承されねばならない (神田橋, 1984, p14)」というふたつの思いが生まれてきたと語る。

ここで、桜井の把握した「ニュアンス」は、Reik の言う「応答」に近いものであろう。神田橋はこの「ニュアンス」について「印象」という言葉で表現する。桜井先生はいつも「なんだか」という言葉を頭につけて、この印象を語っていたという (神田橋, 1984, p43)。五感で捉えられる観察だけではなく、その総体としての「印象」や「ニュアンス」、面接者が内的に把握するものであり、面接の質を決定づけるほどの重要な要素である。やはり、Reik が概念化した応答に近いと考えられる。

もうひとつ、神田橋は、「胸骨部をアンテナにした共感法 (神田橋, 1984, p162)」として、面接中にクライアントのこちらに向けた気持ちを胸骨部で感じる技法を提唱している。クライアントの心が胸骨の中央あたりに激突すると空想するのである。そして、セラピストが胸骨の中央で「何かくすぐったいような、むず痒いように (神田橋, 1984, p161)」感じた感覚は、「相手の表情、態度、言葉の調子、内容の総合されたもの、その総合体でもってこちらに投げかけ

られている気持、に相応しているらしいと思えるようになった (神田橋, 1984, p161)」とのことである。この方法によって、治療関係の中にクライアントが投げかけてくる、感情、願い、気持ちの類を細かく把握できる気がする」と神田橋は語る。

ここで胸骨で感じる「相手の表情、態度、言葉の調子、内容の総合されたもの、その総合体でもってこちらに投げかけられている気持ち」は、Reik の応答に近似していると考えられる。しかし、大きな違いは、Reik の応答の場合、胸骨で感じるというイメージ法は用いないところである。

神田橋はまた、こうした意識的な話の聴き方は、優れた治療者は意識的には行っていないだろうと述べる。その代表例として神田橋が挙げているのは成田善弘である。「自己の心身をそのままアンテナにしておこなう感知法は、天性のものであり、そのような素質の人には何ら意識的努力は不要なのかもしれない。(神田橋, 1984, p162)」と神田橋は言う。

神田橋は、意識的にクライアントの身になる技法と、クライアントの身にならない共感法は別個の技法として論じている (神田橋, 1984, p162)。後者では、相手の投げかけてくるものをもつばら理解していく方法であり、当然関係が大切にされると述べている。

(2) 成田善弘と応答

—セラピストの「白状」と応答—

神田橋から「自己の心身をそのままアンテナにしておこなう感知法」を用いているとされた成田 (2007, p89) は、「そう言われればそうだろうなと感じた。(成田, 2007, p90)」と述べている。成田が何について論じている時に、神田橋のこの指摘が出てきたかということ、治療者の「共感、解釈、自己開示」について述べている時である。

まず、「解釈」についての成田の解釈が興味深い。成田は自分の言葉で「解釈」を言うことになると述べる。「それまで患者がなぜそのような言動をするのかよくわからなくて不思議に思っていたことが、実は患者が今まで生き残ってくるためにそうさせざるをえなかった方策であったのだという理解が私の中に生じたときに、その理解（発見）を患者に言葉で伝えること（成田, 2007, p87）」

成田がここでいう「理解（発見）」は Reik の「応答」に極めて近似していると言える。ちなみに、Reik はこのようなセラピストの能力は生得的であるという立場を取る。Reik は「第3の耳で聴くこと」の第1章「どうして心理学に興味を持つようになったのか」の冒頭このように述べる。「サイコロジストは、感情的な問題に関心を持つのだが、生まれるのであって、作られるのではない。（Reik, 1948, p3）」

ここで、Reik は音楽家と同じであると述べる。「サイコロジスト同様、音楽家も生まれるのである。しかし、ものになるためには、長く厳しい訓練を積まなくてはならない。才能だけでは十分ではないが、才能なき努力は無駄である。（Reik, 1948, p3）」

成田は、生得的な能力なのかどうなのかということについてはふれてはいないが、Reik のいう「応答」に該当することについて、次のように述べる。「私は面接場面で、わが身にどういふふうにかたえてくるかということを大事なことと考えている。その場の雰囲気が、私の中に入りこんでくる、それをキャッチしたものを言葉にしたい（成田, 2007, p90）」そして、言葉にする際は、なるべく「私」を主語にして「白状」するように伝えることを勧めている。セラピストが感じている陰性の感情も、治療についての限界の認識も、素直に省みて率直にクライアントに「白状」するよう努めていると述べる（成田, 2007, p90）。

「白状」はときに残酷になることを成田も認める。たしかに、そうだろう。治療者が「興味がない」という感情を持ったとして、それを白状したら、クライアントが場合によっては怒って中断して、傷つくことになるだろう。よく熟考するように成田は注記しているが、その判断の目安のひとつは「治療者が患者の役に立ちたいと純粹に思っているか（成田, 2007, p90）」どうかであると成田は述べる。ここは、ずいぶん楽観的に筆者には感じられる。要は、ここでセラピストに感じられた感情、つまりは、「白状」する内容のセンスにかかってくるのではないかと考えられる。「白状」する内容とは、つまりは治療者の Reik の言うところの応答であり、成田の言葉で言えば「理解（発見）」である。この、応答のセンスがあるかないかということは、Reik のいうところの生得的な要素を多分に含み、治療者としての才能ということにもかかわってくる問題なのではないかと考えられる。

また、生得的な要素も含まれるだろうが、経験や訓練によってセンスが磨かれるとも考えられる。われわれが、優れた臨床家のセラピーを受けたり、スーパーヴィジョンを受けたりする中で、少しずつ学んでいくことも、このあたりのところの妙味であり、何かであるとも、考えられる。

(3) 河合隼雄と応答

—セラピストの開かれた態度と応答—

河合隼雄の心理療法論「心理療法序説」においては、「応答」について直接的には、次のような2箇所の記載がある。ひとつめは、心理療法の様々な技法について触れた箇所である。「多くの技法があるが、意識—無意識、という軸で位置づけてみることもひとつの方法であろう。対面での話し合いは、もちろん意識的なかわりが強い。しかし、それに対する治療者の応答によって、クライアントの心のはたらく層は変

化してくる。クライアントが『何だか外が怖くて一歩も出られないのです』と言ったとき、『何時からそうになりましたか』などと質問していくと、意識的な働きが強くなる。『それは辛いことでしょう』と言えば、感情的なところが作用するだろう。ただ『はい』とだけ言っていると、また違った反応になってくる。もちろん、このような言語表現の形式だけではなく、治療者の心の開き方ということも、関連してくるが、ともかく、治療者はこのクライアントとどのようなときに、どのあたりの層に焦点を当て応答している、ということは意識していないといけない。(河合, 1992, p165)』

もうひとつは、アクティング・アウトについて論じている箇所である。「スポーツにしる芸術にしる『適度』というものがあって、それをピタリときめるのが芸なのだから、心理療法家は『心』のことについて、適切なおとこをきめる修練を積むべきであると思う。治療者の『適切な』応答が、相当にアクティング・アウトを減少させると考えられる。(河合, 1992, p239)』

これらの「応答」はいずれも「セラピストの発話」あるいは「セラピストの言語的介入」という意味で使われている。Reikのいう意味での「応答」ということになると、河合隼雄の場合、先ほどの記載にもある通り、「治療者の心の開き方」という形で論じられている。第1章、「心理療法とは何か」の中で河合は、心理療法のモデルのひとつとして成熟モデルを提示している。成熟モデルとは、クライアントが問題や悩みを語り、それに耳を傾ける治療者の態度によって、クライアント自身の自己成熟過程が促進されるという考えである。河合は繰り返し、セラピストの態度がオープンであることの重要性を指摘する。「簡単に言えば、クライアントという存在に対して、できるだけ開いた態度で接し、クライアントの心の自由なはたらきを妨害しないと同時に、それによって生じる破壊性

があまり強力にならぬように注意することである。(河合, 1992, p13)』ここでいう、オープンであるとはどういうことなのか。まず、何に対してオープンであるかということ、無意識に対してである。また、無意識に対して開かれているためには、セラピストに体験に根差した相当な知が必要であるとも河合は述べている(河合, 1992, p25)。

無意識に対して、オープンであるとはどのようなことなのか、河合は語る。「治療者は、クライアントが語る、時には波瀾万丈とも言えるような個々の『事件』に注目するのではなく、そのような事件にまきこまれざるを得ないようなことまでして、その背後にあるたましいは、何を問いかけようとしているのか、それに耳を傾けようとするのである。(河合, 1992, p23)』たましいが何を問いかけようとするのかに耳を傾ける、これこそが河合の言う、開かれた態度であると考えられる。

河合は面接室が密室であるがゆえに、セラピストもクライアントも無意識に対して開かれていると論じる。「その解放された空間(面接室)のなかで、無意識界に住む人々—そして動物まで—が『自由に』『平等に』接触するのである。そのような『非日常』の世界のなかで、治療者もクライアントも自分たちの心のなかに『流動する』ものを感じ、自由な交換が生じて『変貌』を体験する。(河合, 1992, p231)』

「治療者の開かれた態度」という形で論じられている「応答」は、転移・逆転移の文脈でも考えられている。しかし、逆転移を治療に有効に使うには訓練が必要であると考ええる。「実際の場面においては、ともかく対話は続け、感情も自然に流れるわけだから、いちいち自分の感情をチェックなどしてはられない。妙にチェックなどしていると流れが壊れてしまうだろう。(河合, 1992, p217)』このように、河合は述べ、「スポーツなどと同様で、夢中でやっ

ていることが道理にかなうようになるように、実戦を通じて訓練されることが必要と思う。」と論じる。

洞察の文脈でも Reik の「応答」に該当することが論じられる。河合は安直に「はっとわかる」という洞察については懐疑的な見方をする(河合, 1992, p224)。例として出しているのは「京都を知る」ということである。「京都を知るためには、大分あちこち歩き回ることが必要であろう。同じ道を何度も通る必要もあるだろう。そして、相当の期間を経て京都のことが大分わかかったといっても、知りつくすことはないだろう。(河合, 1992, p244)」このようなイメージで「洞察」を河合は考えるが、このようなイメージの洞察も、セラピストの洞察ということ言えば Reik の言う応答に近い概念であると考えられる。

(4) 山中康裕と応答

—ここに添うことと応答—

河合(1992)は治療者の態度に重要なこととして、「オープンであること」を論じているが、山中(2000)においては、それが「ここに添う」として論じられている。少し長いが山中が「ここに添う」という態度について論じている箇所を引用する。「治療者としての私は、もっぱらクライアントの『ここに添う』とでもいうべき在り方で接していることが多いからである。しかも、この道を三十年も歩いてきてみると、サイコセラピーでもっとも大切な態度は何か、何がクライアントのこのころの中で、治療転機となっていくか、ということ考えたとき、こうしたセラピストの態度こそが、その原点を用意するらしいということが、見えてきたからでもある。また、『ここに添う』という在り方は、いわゆるユング派とか、ロジャーズ派とかいった、流派に関係なく、サイコセラピー一般の原点を形成し、かつ、それを成就せ

しめていく根本的な態度であることが、ここ数年とみに明らかになってきたからでもある。(山中, 2000, p4)」

「ここに添う—セラピスト原論」の第2部は、対談になっていて、山中康裕、岸本寛史、宮本ゆり子、三枚奈穂の話し合いの逐語録が掲載されている。ここで宮本ゆり子が語っている不登校を主訴としていたケースが興味深い。

そのケースにおいて、宮本はときおり風景構成法を実施していたが、セッション間の風景構成法の「流れ」が読めずに悩んでいた。そこで、実施した風景構成法を「何度も何度も」眺めていくうちに「流れ」が見えて来たという。「そして、私なりにですが、何か実感できてきました。不思議なことに内的な世界が実感できることは、クライアントさんの主観的な体験を外側から理解する、つまり客観的にはどういうことか、にも繋がりました。それは霧が晴れるような不思議な感じでした。(山中, 2000, p94)」

この体験について宮本は、「これが先生(山中康裕:引用者注)の言われる、『片足をこちらにつけて、もう一方の足は一緒に乗る』ことなのではと感じた」と述べている。この表現は山中康裕のメタファーで、溺れている人(クライアント)を助けるときに、両足を突っ込んで仕舞っては水の流れが凄すぎて助ける人(セラピスト)も溺れてしまう。両足を岸につけていても届かない。したがって、片足は岸につけて、もう一方の足を水につけて、水の速さや冷たさを知りつつ助けなくてはならない、という比喩である。

この宮本の体験については、Reik の言葉で概念化すれば「応答」であり、山中の言葉で言えば「ここに添う」あるいは「片足をこちらにつけて、もう一方の足は一緒に乗る」ということなのだろう。

(5) 辻悟と応答

—治療関係の中での間接化と応答—

辻(2003)の理論の中でReikの「応答」に該当することは、「こころへの途」の第5章「むすびにかえて—残された課題ならびに治療との関係—」で、次のように語られている。まず、辻(2003)は、「精神・心理臨床においては当人にしかできない当人のこころの変化を臨床という人と人との関係がいかにもたらすことができるのかという、根本的な問いが生じていく。(辻, 2003, p188-p189)」と指摘する。そして、かかわる側が治療関係の中ですることについて、「具体的には『いま自分は、どんな気持ちなのか、何を思っているのか、何をしようとしているのか』を、自分自身に問いかけ自分と会話することである。(辻, 2003, p194)」と述べ、それを「治療関係の中での間接化」「かかわる者の直接性に対する間接化の複合の実践」と表現している。「間接化」とは辻の理論の中で、重要な位置を占める用語のひとつである。外界が見えてくるということ自体が受動的で直接的な体験であるのに対し、それを能動的に捉えかえし、間接化することで、目に見えないこころ(内界)の動きを知ることができ、自分について見ることができるようになる、と辻は考える。

辻も山中同様、両足のメタファーを用いて、かかわる者の間接化過程について論じる。「片足をすでに活動している見える相手に向かう直接性の路線に、もう一方の足を間接化の路線にのせる。両者はしばしば対立し、葛藤をもたらす。それを避けずに両足を踏まえて立っている自分が、両者の複合を生きている。生きているところには葛藤があり、葛藤がドラマをもたらす。その時の事情によって、どちらかの足にウエイトがかかるということも起こりうるであろう。それをも踏まえて生きていると、自分が自分のドラマを生きているという実感が生じてくる。その点では臨床の対象にも、かかわる者に

も変わりはない。(辻, 2003, p196)」

辻が例としてあげているのは、クライアントの家族が治療者に「どうすればいいのでしょうか」と問う場合である。その家族に対して、治療者から自分自身と会話する方向で働きかけても戸惑う家族がほとんどである。その場合も、「そう言われても戸惑う?」と家族に起こっている戸惑いへの理解を表明しておくことが重要で、そのことが家族と同じ地平に位置していくことであると辻は考える。

Reikの言葉で論じられていた応答は、直接性、間接性のいずれの路線をも、両足を踏まえて立つ治療者の自分という形で表現されていると考えられる。両者の葛藤を回避せずにかかわる者が生きることが、当人のこころの変化へとつながっていくと考えられている。

(6) 伊藤良子と応答 —「発話者としての〈私〉の生成を聴くこと」と応答—

伊藤良子の理論においては、セラピストの逆転移や応答といったことは、メインには論じられていない。彼女は、逆転移と転移を分けて論じることについて、反対であって、「転移というひとつの現象があるとの視点から出発することが必要であろう。(伊藤, 2001, p68)」と考える。

そして、その転移という現象を、セラピストの逆転移も含む相互的なものと考えた上で、その本質を「死の欲動」とみるとみる。さらには、セラピーにおいて、転移を場として、発話者としての〈私〉の生成が行われることで、象徴化が起こると考える。

伊藤の報告しているケースをひとつ示そう。箱庭療法の事例である。高校1年生の不登校のケースで、大学入学までの3年半のプロセスが描かれている。フォローアップも含めると6年半のケースである。その中で展開期にあたる第三期の冒頭、次のような記述がある。

中央部に緑の木を覆うように灰色や薄い青、淡い紫の木々が植えられ、その周りのあちこちに貝やビー玉が置かれる。その手前に青っぽい色の電池が十三本、波線を描いて並べられる。

『きれいになるかと思って。』（『』はクライエントの発言、「」はセラピストの発言。以下同様：引用者注）そこに表現されている彼の世界は、セラピストの理解を超えたものであったが、しかし確かにそこには「彼らしさ」が感じられた。二人でしばしこの箱庭を鑑賞する。「海の底みたい」『この世のものでない。現実的なものでない』（伊藤，2001，p208）

このときに、「彼らしさ」を感じるセラピストの内的なセンス、ここに、Reikの言うところの「応答」に該当するものがあると考えられる。ただし、伊藤は「ただそれを聴くのみである（伊藤，2001，p238）」と表現する。また、このケースでは、セラピストが理解できないところや感じたところを、十分に配慮をもちつつ、クライアントに伝えることをしている。例えば、引用中にある、「海の底みたい」というかわりである。そうでないと、クライアントとセラピストの断絶が大きくなってしまうと伊藤は考えている。通常の神経症レベルの箱庭は、見るだけでセラピストがその意味を感じ取ることができるので言語化はむしろ妨げとなるが、このような理解を超えた箱庭の場合は、セラピストの言語化がある方がよいと考える。

このあたりのセラピストとクライアントのやりとりのプロセスを伊藤は次のように振り返る。「出来上がったもの（箱庭作品：引用者注）をセラピストと二人で『鑑賞』することによって、セラピストは彼の『感覚』に近づき、逆にまた、セラピストの感じたものがM（クライアント：引用者注）の箱庭に注入されて、その箱庭は二人で共有されるものとなって行った。すなわち、彼が作り上げた箱庭を媒介として治療関係は進んでいった。そしてそのなかから彼の『感情』

が現れ出てきた。」（伊藤，2001，p222）

III. 考察

(1) 転移・逆転移、治療者の態度論としての応答

以上、神田橋條治、成田善弘、河合隼雄、山中康裕、辻悟、伊藤良子といった、日本の代表的な精神・心理臨床家の、各心理療法論における「応答」の位置づけについて論じてきた。各臨床家の理論は、各人の臨床経験に基づいて構築されたものであり、それぞれ独自の体系を持っているが、決して閉じた体系がバラバラにあるのではなく、互いに関連づけて論じることが可能であった。ここでは、ふたつの観点から整理しておきたい。第1は、転移・逆転移の文脈で論じられる「応答」、第2は、セラピストの態度論としての「応答」である。

第1の、転移・逆転移の文脈で、論じられる「応答」であるが、この場合の逆転移とは、セラピストの主観的な反応のことである。神田橋は、面接者が感じる「印象」や「ニュアンス」としての「応答」を論じ、近い未来を的確に言い当てる高質の診断の技術として、いかに伝承されうるかを考察し、「胸骨部をアンテナにした共感法」という技術としてまとめていた。

それに対して、胸骨部をアンテナにするというイメージ法を用いないのが、成田の聴き方であった。成田は、「自己の心身をそのままアンテナにしておこなう感知法」を用いていた。成田は、広義の逆転移を通じて、クライアントについて、そして、セラピスト自身について、知らされてきたと振り返っている（成田，2007）。伊藤（2001）も、転移の側から、それを象徴化していくことの意味について、深く考察していた。

第2の治療者の態度論の文脈で論じられる「応答」であるが、河合（1992）は繰り返し治療

者が無意識に対してオープンであることの重要性を説いていた。そして、その態度の真髄を、たましいが何を問いかけようとしているかに耳を傾けることであると論じていた。さらには、山中も、辻も、治療者の態度をクライアントの地平と、両足のメタファーを用いて論じていた。山中は、「ここに添う」という在り方として「応答」を論じ、それを「片足をこちらにつけて、もう一方の足は一緒に乗る」というメタファーとしても述べていた。一方、辻は、直接性と間接性の葛藤を生きることについて、このメタファーを用い、治療者自身が自分自身と会話することを具体的かつ中核的な課題として上げていた。

(2) 「応答」研究の今後の課題

「応答」というひとつの言葉にも、さまざまな文脈で、さまざまな意味が与えられ、重層的なその概念の奥行きは、クライアントの言葉の持つ奥行きにも通じる場所がある。また、「応答」という言葉が、用いられていなかったとしても、「転移・逆転移」や「ここに添う」など、各治療者が大事にしてきた概念や言葉としても「応答」は論じられてきたと言えるだろう。ここで、応答研究の今後の課題について考察することで、まとめとしておきたい。

第1に、各論者は、日本の代表的な心理療法家であるが、各論者にはそれぞれフロイドやユング、ラカンなど、コミットした心理療法の理論があり、日本の心理臨床家の各理論間の異同を真に論じるためには、そういったオリジンまで遡って丁寧に検討していく必要があるだろう。

第2に、「応答」で述べようとしてきたことは、チェックリストのような質問紙で、捉えることは難しいのだろうか。ふたりのこととして、起こっている間主観的な現象である「応答」をひとり、チェックしたところで、主観的思い込みの域を脱しえないかもしれないが、スーパー

ヴィジョンや事例検討会などで使用するのなら、意味のあるスケールとなるかもしれない。

第3に、「応答」に関する、専門的な、教育、訓練についてである。「応答」にあたるセンスをどのように教育し、訓練していくのか。スーパーヴィジョンやクライアント体験において、どのように学ばれるのか。検討していく必要がある。

第4に、「応答」と日本の心理臨床家の理論について、本研究では、主に、精神分析学や、分析心理学の考え方を基本としている臨床家について検討してきた。他の立場、例えば、人間性心理学の立場に立つ臨床家において、「応答」はどのように取り扱われているのか、などについても検討を続けていかねばなるまい。

そもそも、精神分析学の中だけでも、臨床家をもっとたくさんいるし、代表的で先導的な臨床家に限ったとしても、検討すべき人物はまだ多いだろう。今回検討されたのは、ほんの手始めにすぎないが、ひとりひとりの臨床家の考え方の違いや、共通点について考えていくことは、われわれ自身の考え方が自ずと問われることになる。さらに、検討を進め、考えを進めていきたい。

文献

- Arnold, K. (2006). Reik's theory of psychoanalytic listening. *Psychoanalytic Psychology*, 23(4), 754-765.
- Greenspan, S.I. & Greenspan, N.T. (2003). *The clinical interview of the child*. American psychiatric publishing. (濱田庸子訳 (2008): *子どもの臨床アセスメント—1回の面接から分かること*. 岩崎学術出版社)
- 原谷直樹 (2009). 心理療法における応答の多層性. 関西大学文学部心理学論集 3 55-59.
- 原谷直樹 (2010). Theodor Reik の応答論:

- 自分自身の声に耳を傾けること 精神分析
研究 54 (2) 63-73.
- 伊藤良子 (2001). 心理治療と転移：発話者として
の「私」の生成の場 誠信書房
- 河合隼雄 (1992). 心理療法序説 岩波書店
- 神田橋条治 (1984). 精神科診断面接のコツ
岩崎学術出版社
- 村瀬嘉代子 (2003). 統合的心理療法の考え方：
心理療法の基礎となるもの 金剛出版
- 成田善弘 (2007). 新訂増補 精神療法の第一
歩 金剛出版
- 成田善弘 (2008). 逆転移を通して学ぶ 精神
分析学研究 52 (3), 221-229.
- Reik, T. (1948). Listening with the Third Ear:
The Inner Experience of a Psychoanalyst.
Farrar, Straus and Giroux.
- 辻悟 (2003). ころへの途：精神・心理臨床
とロールシャッハ学 金子書房
- 山中康裕 (2000). ころに添う：セラピスト
原論 金剛出版